西野委員からの提供資料

淀川水系流域委員会
第２回琵琶湖部会検討会（H15.7.9）
資料　２－４－１

水位検討班論点

１．「自然における水位変動の様相」とは具体的にどのようなもので、現在の状況はそれとどのように乖離しているのかについて、事実関係の整理が必要。

・ 生物多様性と生態系機能とを歴史的に形作ってきた自然の季節的な水位変動とは具体的にどのようなものか？　（資料１参照）
・ 琵琶湖、河川の水位低下が生態系や生物多様性の与えた影響のメカニズムや程度についてある程度の検討はなされてきたが、まだ十分な検討、調査とはなっていない（資料２参照）
・ 流域全体に関する視点から水位変動を捉えるべき
（例）琵琶湖と内湖、琵琶湖への流入河川、淀川（三川合流点、淀川大堰等）

琵琶湖：水位操作規則変更に伴う生態系への影響（資料２参照）
1992 年の水位操作規則変更以後、琵琶湖の生態系が被ったと考えられる影響は、
（１）　季節的水位変動パターンの変化により生じたと考えられる影響、
（２）　夏期を中心とした著しい水位低下の頻発化による影響
に大別される。水位が回復するとほぼ回復する一時的現象と、不可逆的現象とがあった。
またマイナスの影響が殆どだが、なかにはプラスと考えられる影響もあった。

河川
川本来の水位変動や攪乱を川本来の生態系の許容範囲と関連して定義、説明すべき
・ 瀬切れと縦断方向の不連続性との関係
・ 瀬切れをダムで解決することが本当に生態系に優しいのか
・ 扇状地河川の天井川が瀬切れの原因。堤防を積み上げてきたのが主因であり、掘削や引堤の促進が本来の解決法である。
ダム

２．利水需要の見直しが全くされていない

３．水位見直しに伴う洪水ポテンシャルの見直し
・ 水位上昇（洪水）に対する許容レベルをどこにおくか

４．水位と水量、水質との関連

５．水位と舟運